

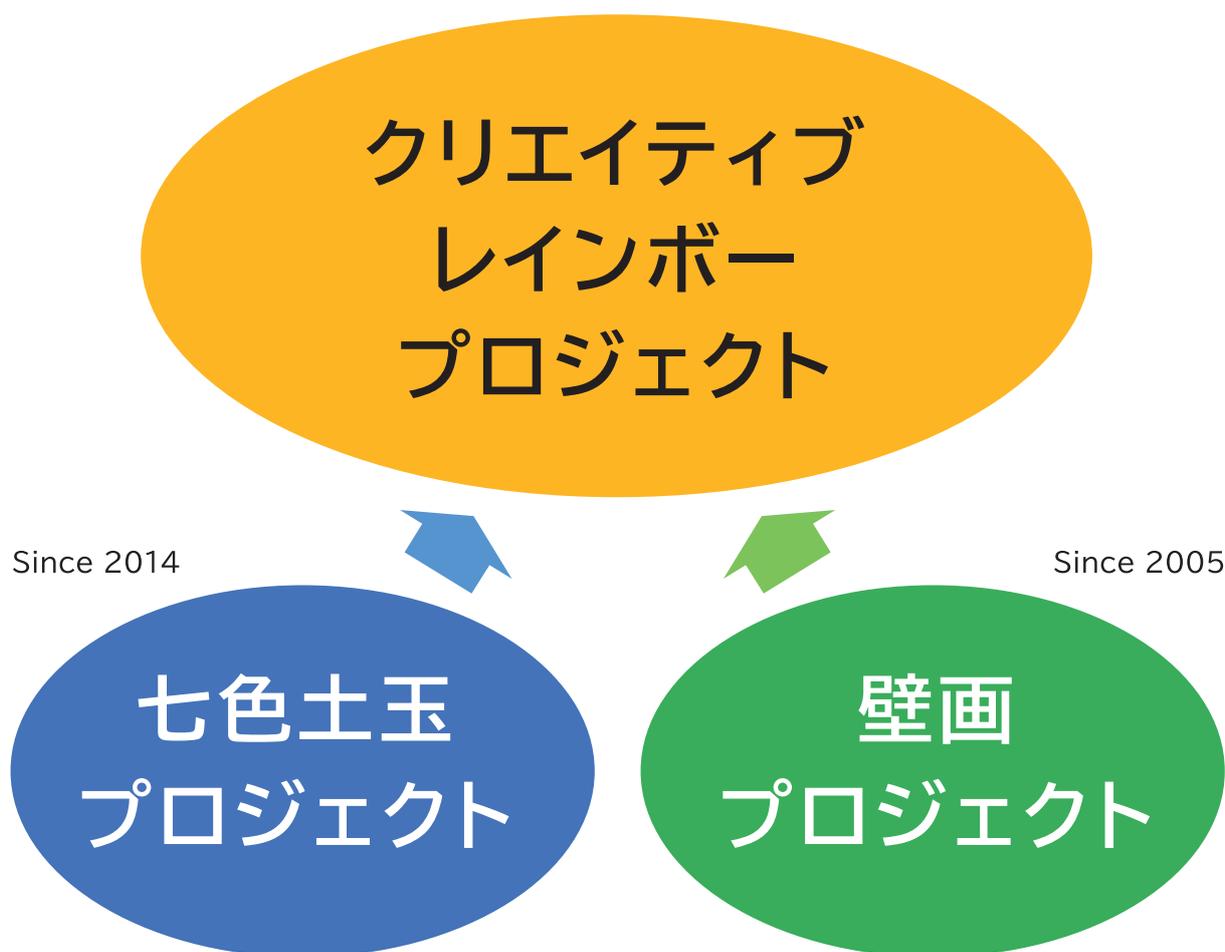
小さなクリエイターの視点から
宿る天性の創造力・人間力を育む
芸術教育の可能性と役割

壁画プロジェクト

HAYASHI KAKU



小さなクリエイターの視点から
宿る天性の創造力・人間力を育む
芸術教育の可能性と役割
壁画プロジェクト



目 次

1. 芸術教育の可能性と役割について
2. 壁画プロジェクトが育む能力
3. 宮澤賢治の世界が引き出す
子どもたちの創造性
4. 教育的効果について
5. 子どもたちの自己肯定感と
自信への醸成
6. 壁画プロジェクトで見えた課題
7. 地域社会への貢献としての芸術
8. 成果の可視化と波及効果
9. プロジェクトへの協力
10. 活動歴 年表

1. 芸術教育の可能性と役割について

1.1 “芸術教育”の定義と本質

芸術教育とは、「芸術的表現と認識の能力を、目や、手、口、身体などの感覚器官と、心を通じて高め、感情のコントロールをはかることによって、人間形成をめざす教育（世界大百科事典第2版、「芸術教育」の用語解説から抜粋）」と定義されています。

絵画彫刻、音楽、工芸、文学、演劇、スポーツ、舞踏、書、デジタル表現、漫画、アニメ、ゲームなど、拾い上げることができないほどの分野に進化し続けています。芸術教育はそれぞれの分野での技術や能力を伸ばす指導と、**芸術の持つ機能によって人間形成をはかる**指導とがあります。この二つは相互に関連していますが、前者は教育課程において芸術教科を教えるものであり、後者は Education through Art（芸術による教育）の考えです。

壁画プロジェクトは、後者の

芸術の持つ機能によって人間形成をはかる
Education through Art（芸術による教育）
クリエイティブ パートナーとしての考えで
活動を展開しています

一般社会の中で要求される能力は、グローバル化の時代、多文化共生の時代の今、大きく変化しています。世界中で、より解決困難な政治・経済・環境などの問題を抱え、グローバルに物事を調整し、統合し、判断し、創造し、行動する人材が求められています。機転が利き、発想力に長けた、より大きく逞しい根幹をもった人間の育成を教育の目標に据えなければなりません。そしてなによりも芸術を活用した教育は、直近で崩壊しかけているクラスをも救うことができるはずです。子供たちの変化がプロジェクト経験前と後では歴然と違うのです。

五感と頭脳を連動させる
体温を感じとることができる壁画制作は、
子どもたちに宿る天性を引き出し
創造力、人間力を育みます

1.2 感性と知性の融合がもたらす価値

芸術の持つ本質的な営み

「見えないものを見る目」

「聞こえないものを聞ける耳」

そして、

「心に届く」「心を開く」「心に寄り添う」

を丁寧に追い求めてきました。

人類の生命体としての進化の証を誰もが認めるところです。

しかし、歴史的にどの時代にも、どこにでも、どの人にも、その時々心の多様性、環境の変動、虚偽と真実の交錯などがあり、多様な芸術に表現してきました。

このプロジェクトは、感性と知性のバランスを融合させながら、自らが持っているにもかかわらず、だれにも見えなかった子ども達の天性を引き出そうと試みる取り組みです。本人はもちろんのこと、担任の先生方を含めて、みんなの目が輝き出して行くのです。

不安感が自慢げな笑顔に一変していく様子が、次々と体现できます。

芸術教育はどのような役割と可能性を持つのか

～ One for all, all for one ～ 宇都宮市立宝木小・壁画プロジェクト
文星芸術大学環境芸術研究室 林 香 君



Step2 徹底的に形・骨格・色・動きなどの観察を促す

脳全体を使う壁画プロジェクト

感性と知性の分岐点をどう育てるか



子どもたちの天分想像力と感性が感動を生み出す

キーワードを探すための読み込みを何度も繰り返す

Step1

宮澤賢治にも教科書にも挑戦



3年「夕日がせなかをおしてくる」



6年「やまなし」



5年「注文の多い料理店」



4年「ゼロ弾きのゴーシュ」

壁画プロジェクトは全員で一つの作品を仕上げるのが目的 画面構図を話し合う



Step3

型紙制作から

色を付ける

子どもたちは色の魔術師



3年「サーカスのライオン」



2年「ニヤゴ」



初めての大きな画面／宇都宮市／さつき幼稚園（年中・年長）
4～5歳からの遊びの本質（音楽・美術）の芸術教育研究

1.3 脳科学的見地からの検証に期待

近年の研究で、芸術活動が子どもの脳の発達に極めて大きな影響を与えていると、壁画プロジェクトを通して検証し続けています。手や指を使った具体的な制作活動は、脳の様々な部位を活性化させ論理的思考、記憶、感情制御など多岐にわたる認知機能の発達を促進すると言われていています。本プロジェクトの壁画制作は視覚・聴覚・触覚を統合的に使う回路をフル回転して進めていきます。子どもたちの脳に多面的な刺激を与え、感性や知性の回路がより柔軟、かつ強靱になっていく様子が読み取れます。

たった8～10時間で3.6mの作品を仕上げるだけではなく、全員で作るための意見のすり合わせ等コミュニケーション能力が必要になります。作品に仕上げていくためには、脳と手の連携状況を創り出す複雑な行動の総結集もあり、One for All, All for One の壁画制作のための集合体に短時間で変貌していくと考えています。

芸術が心と脳の双方向的な関係性を持っています。創造のメカニズムに関する実践的なかたちある壁画制作のビッグデータの分析について、専門の分野からの検証を期待しています。

クリエイティブ・パートナーシップの活動 / イギリス

英国の政府機関アーツカウンシルが、2002年から繰り広げられているクリエイティブ・パートナーシップという授業を受けた子ども達 1万3000人を対象に実施した教育研究財団による調査結果は以下のとおりである。CP（クリエイティブ・パートナーシップの略）に参加した青少年1万3000人の子どもは、7～11歳、11～14歳、14～16歳の3つに分けて考察してある。7～14歳の年齢階層では英語、数学、理科の平均点で、14～16歳の年齢階層では、総合点と理科で、それぞれ同じ学校でCPに参加しなかった子どもよりも優れた成績を残していたという調査結果であった。



カニ 日光だいや川公園にて制作 宮澤賢治「やまなし」

2. 壁画プロジェクトが育む能力

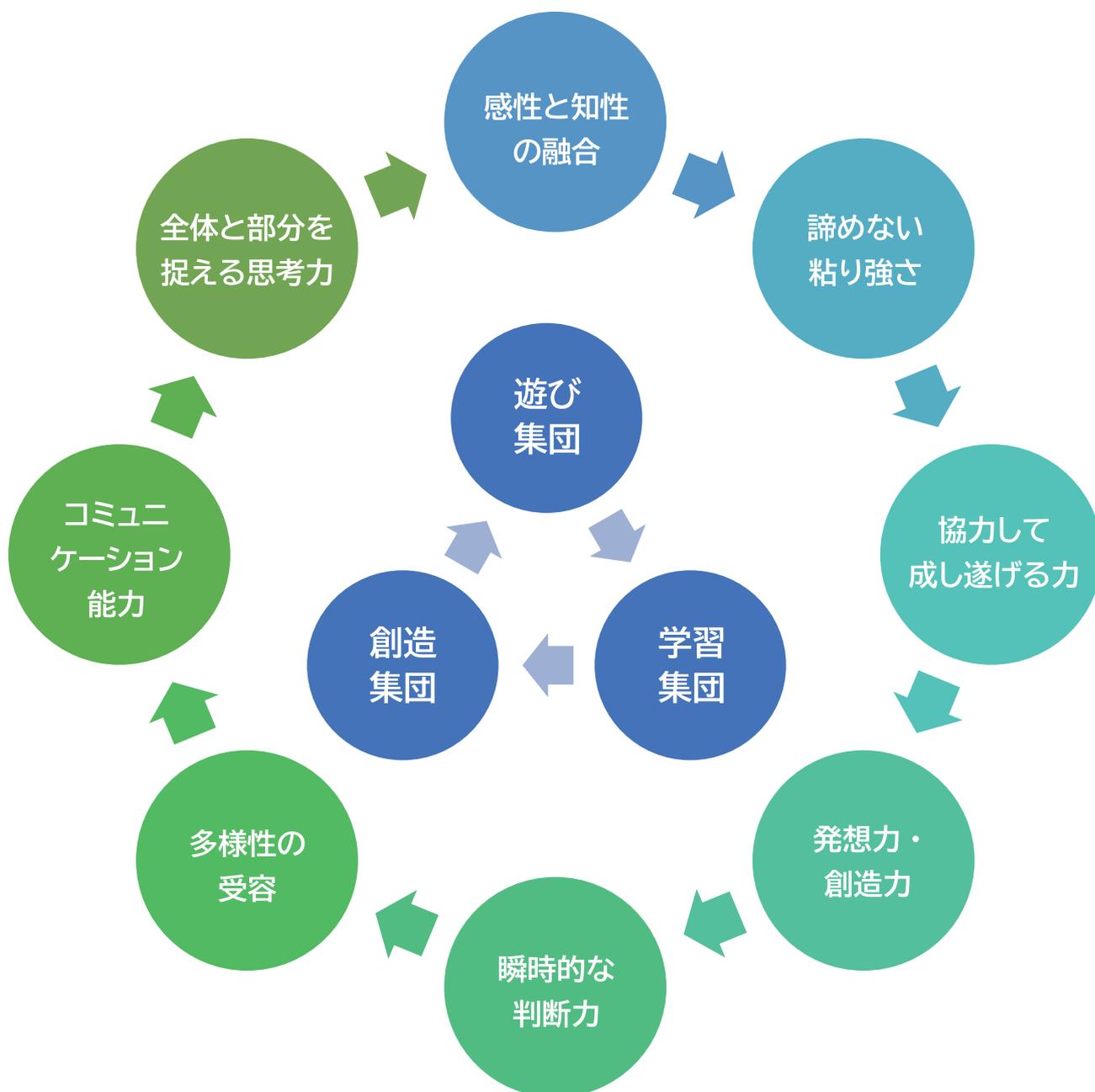
2.1 全体と部分を捉える思考力

壁画制作現場から見える子どもたち

読み込みから完了まで 8～10hour

壁画制作の時間は基本的に10時間以内の制限があり

全ての感覚が自然にフル活用し始めます



2.2 協働で創る壁画のプロセス： 遊び・学習集団から創造集団へ

本プロジェクトの壁画制作は、単なる絵を描くことではありません。短時間で大画面の作品を完成させるため、子どもたちは「One for all, All for One (1人はみんなのために、みんなは1人のために)」というチームワークの精神のもと、極めて密度の高い協働作業を経験します。このプロセスは、以下のような点で子どもたちの人間形成に画期的な効果をもたらします。

★即時的な判断力と選択力

完成図が事前に定められていない中で、子どもたちは互いの表現を観察し、ジャズのセッションのように即興的に色や形を重ねていきます。限られた時間の中で、矢継ぎ早に判断、選択、決定、行動を繰り返すことで、複数のことを同時に考え、まとめる力が養われます。

★多様性の受容と統合

個々の子どもが持つイメージや表現の違いは、制作過程で必ず生じます。話し合いや協働を通じて、作品としての統一感を持たせる方法を学びます。このプロセスを通じて、「学習集団」が互いの個性を尊重し、共に新たなものを創造する「創造集団」へと進化します。

★コミュニケーション能力の向上

自分のイメージを正確に伝え、他者の意見を理解し、時には妥協点を見つけながら共通の目標に向かうことで、実践的なコミュニケーション能力が飛躍的に向上します。現代社会において最も求められるスキルの1つです。

★全体と部分を同時に捉える思考

自分の担当する部分と、それが大画面全体の中でどのように調和するかを常に意識しながら作業を進めます。細部へのこだわりと全体像を見渡す視点の両方を養うことができます。

★多角的な視点と柔軟な思考の育成

物語を読み解き、それを視覚化するプロセスにおいて、子どもたちは多様な解釈と表現方法に触れます。これにより、固定観念にとらわれず、多角的に物事を捉え、柔軟な発想で問題に取り組む力が養われます。

★粘り強さ・諦めない力

困難な作業や意見の相違に直面しても、目標達成のために粘り強く取り組む力を身につけます。

★協力して成し遂げる力

他者とのコミュニケーションを通じて、共通の目標に向かって協力、困難を乗り越える経験を積みます。

★発想力・創造力

課題に対し、既成概念にとらわれない自由な発想で解決策を見出し、新たな表現を創造する力を培います。

2.3 話し合う創作

みんなで話し合いながら、役割分担して、助け合いながら大画面と取り組んでいきます。

ONE for ALL, ALL for ONE



3. 宮澤賢治の世界が引き出す 子どもたちの創造性

3.1 なぜ宮澤賢治作品を選ぶのか

東日本大震災は、私たちに生命の尊厳、自然との共生、そして人間の存在意義について深く問い直す機会を与えました。このような時代だからこそ宮澤賢治の物語に、子どもたちの心を育む上で不可欠な普遍的価値を見出しました。

宮澤賢治は生涯を通じて、人々の幸せな暮らしを願いました。自然への深い畏敬の念や生命の尊厳、そして広大な宇宙とのつながりを子どもたちにも分かりやすい物語として紡ぎ続けました。彼の作品は、時代を超えて読み継がれる普遍的なテーマを内包し、本プロジェクトの根幹を成す哲学と共鳴します。

3.2 言葉が喚起するイメージの力

宮澤賢治の物語は、その観察力と創造力から紡ぎ出された言葉、豊かな擬音語や擬態語、そして比喩表現によって子どもたちの想像力に直接働きかけます。物語を読み進める中で、登場人物の感情や情景を鮮やかに心の中に描き出し、映像を見るように物語の世界を体験することができます。

壁画制作の過程では「言葉から映像を生み出す力」が最大限に引き出されます。子どもたちは物語の描写を自身のイメージと結びつけ、それを視覚的な要素へと変換することで表現する楽しさを発見します。この経験は、単なる読書では得られない五感を活用した複合的な学びへと繋がります。

3.3 物語を通じた普遍的な学び

宮澤賢治の作品に深く横たわる「人間が生きていくための哲学」は、子どもたちが意識せずとも物語のメッセージに触れ、共感し、自身の感性の素地を心の中に芽吹かせます。

・生命の尊厳と共生

「セロ弾きのゴーシュ」や「注文の多い料理店」などの作品には、動物や植物を含むすべての生命への深い愛情と、人間が自然と共生することの重要性が描かれています。命の大切さや多様な存在を尊重する心を育みます。

・困難との向き合い方

「雨ニモマケズ」に代表されるように、逆境に立ち向かう強さや、他者のために尽くすことの尊さが描かれています。登場人物の葛藤や成長に触れることで、困難な状況に直面した際の心の持ち方や、レジリエンス(立ち直る力)を学びます。

・世界共通の価値

宮澤賢治の作品は世界120を超える国で翻訳・出版され多くの人々に愛されています。これは、宮澤賢治の描く世界が持つ普遍的な価値の証であり、本プロジェクトを通じて子どもたちは、世界共通の教養と感性を育てていきます。

4. 教育的効果について

読書体験の深化

本プロジェクトに参加する子どもたちは、宮澤賢治の物語を「多い人で30回」も読み込むことになります。これは、以下の多段階にわたる読書プロセスを経るためです。

- **壁画作品選択のための読書**

どの物語を題材にするかを決めます。

- **一作品に絞り込むための読書**

選定した一つの作品を深く理解します。

- **キーワード・マーキングのための読み込み**

物語の中から重要な言葉やフレーズを見つけ出し、3種類のマーキング（情景描写、登場人物の感情、物語の核心）を行います。

- **壁画の構成考案と場面選択のための読み込み**

どの場면을壁画に描くか、どのように配置するかを考えるために、物語の展開を想像します。

- **画像化するために詳細を抽出するための読み込み**

特定の場面の描写を頭の中で映像化します。

上記の読書を繰り返すことで、子どもたちは物語を頭の中に完全にインプットします。これにより、読書の質が格段に深まり、物語の理解と、そこから広がる創作へと、知性に裏付けされた感性を育むことが、自然にできるようになっているのです。



5. 子どもたちの自己肯定感と 自信への醸成

消しゴムで消さずに修正を重ねることで、 奇跡的に天才脳が働く

徹底した観察を言語に置き換えている宮澤賢治の物語。読み込んで、そこにある表現を感じ取り、壁画にしていくことは、頼もしい水先案内人が存在しているということであり、何度も繰り返して読むことと、徹底した観察をできる限りしてみることを、全員で行っていきます。

動植物・自然に関する観察は、限りある時間の中でも、30分ぐらいで大きく躍進していきます。いろいろな方角から観察・検索して、理解を深めていきます。ルールは、消しゴムで消すことができないマジックで繰り返し描く方法です。自分の描いた形を消すと、短時間の中で、経験値を蓄積できないからです。ひたすら前にポジティブに修正をも楽しんでいくことができます。奇跡的に天才脳が働き始めるのです。





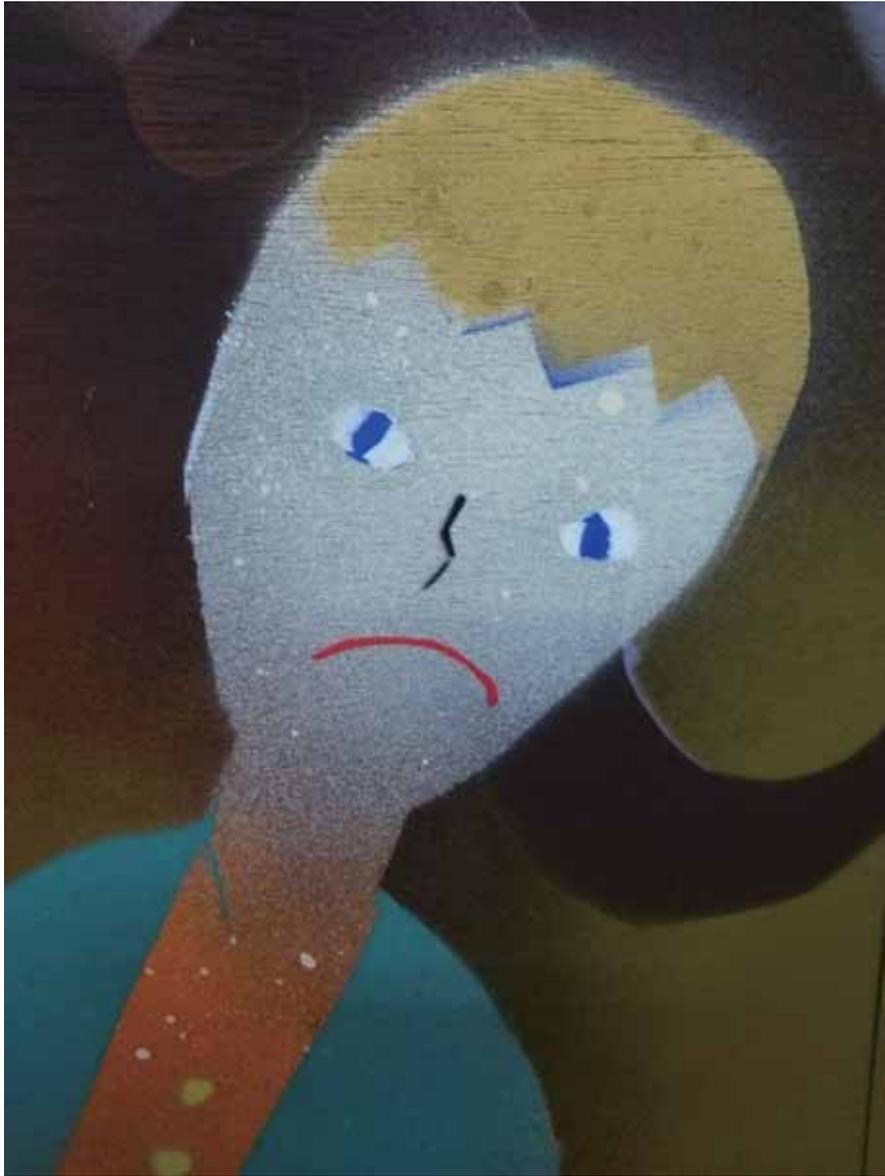
6. 壁画プロジェクトで見えた課題

人間の表情も、動きも捉えているのは10歳まで



この画像は、大変重要な意味を持っています。4年生の作品です。9～10歳を超えた上の年齢層では、人間を描くことが全く深まらないし、うまく描く子もそうはいない！

100作品近く取り組んできた中でわかってきたことですが、成長するにしたがって、人間を見なくなるのだろうか？それとも心を閉ざしていくのだろうか？心のうちまでは難しいのですが、人間の動き、表情を捉えることもなかなかできない。もちろん訓練をすれば違うのですが。人間にもっと興味を持ち、見えない心を見ることや聞こえない声を聞くことにより新しい世界を見つけることにつながるのではないかと考えます。課題解決への一歩になるようなプログラムを開発する価値が大きいと切に思っています。



「ゼロ弾きのゴーシュ」

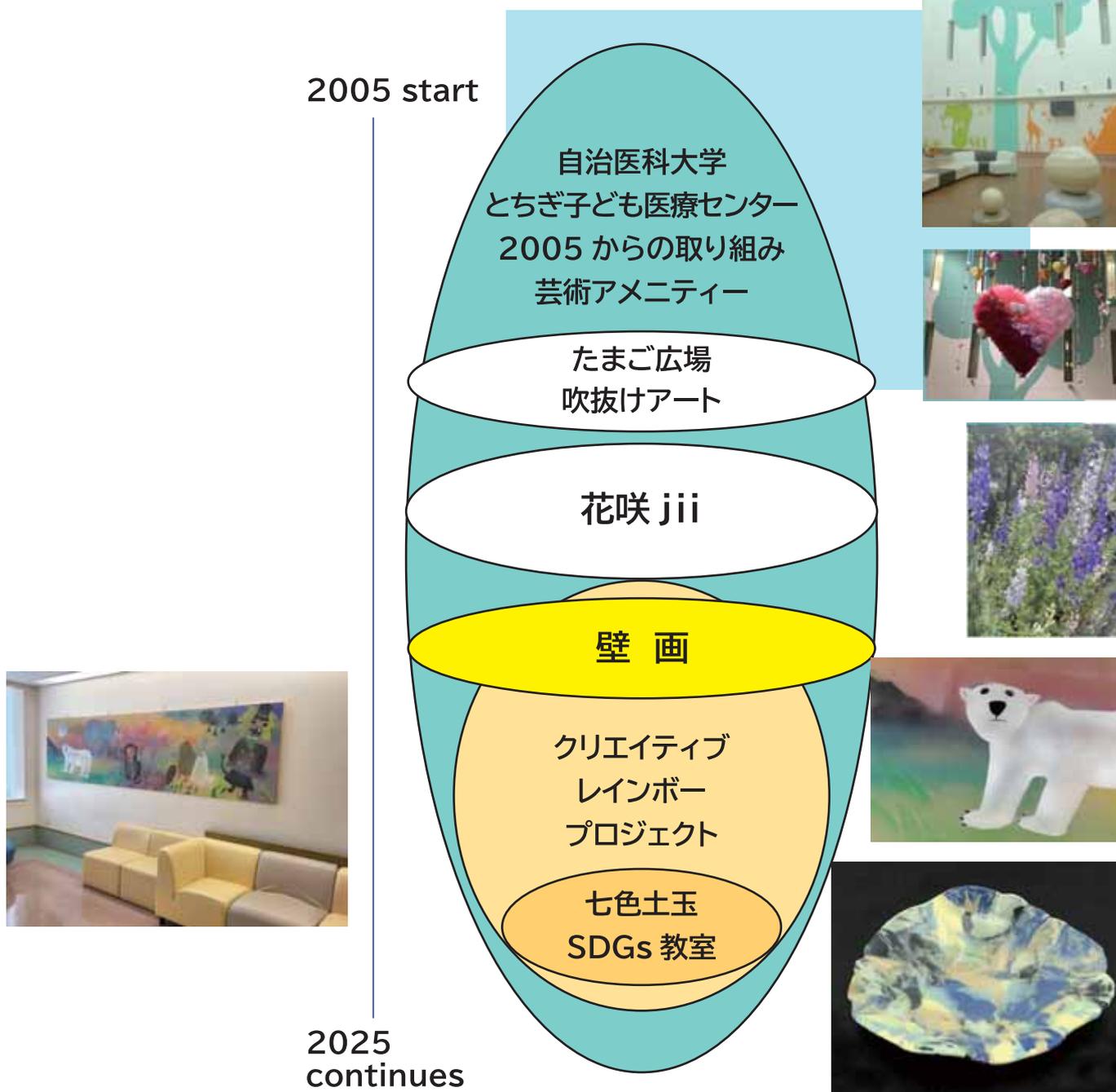


7. 地域社会への貢献としての芸術

自治医科大学とちぎ子ども医療センター

栃木県立リハビリテーションセンターこども療育センター

地域社会から医療現場へのサポート体制



8. 成果の可視化と波及効果

本プロジェクトで制作された壁画は、自治医科大学とちぎ子ども医療センターや独協医科大学日光医療センターなど、多くの人を訪れる場所で展示されてきました。このような場所での展示は、プロジェクトの価値を広く社会に発信することを可能にしています。

特に医療機関での展示は、患者さんやご家族、医療従事者の方々にとって、心の癒しに繋がり、希望を与える存在となり得ます。子どもたちの純粋な創造性が生み出す作品は、見る人の心に温かさや安らぎをもたらし、社会全体のウェルビーイング向上にも貢献します。

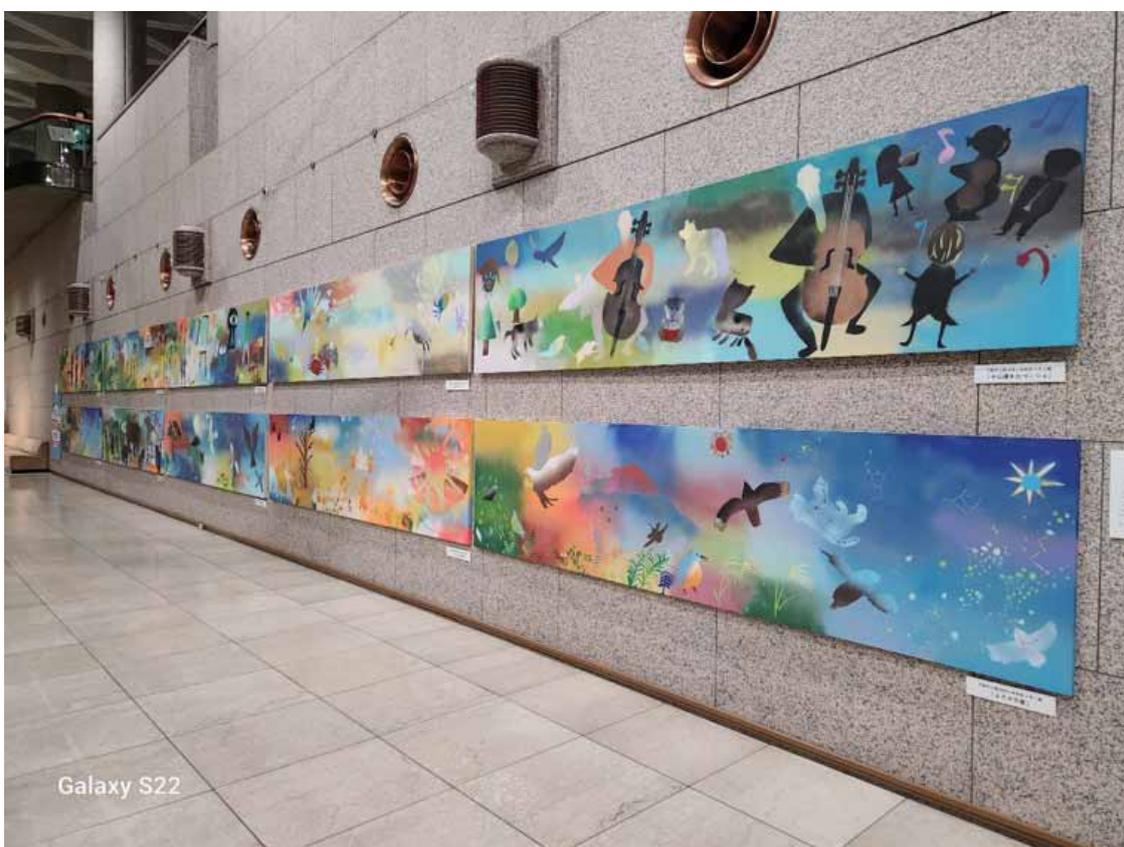


※ 不登校の生徒9人中8人が参加（入院中1名）の小学校、もちろん先生方の声掛けのおかげではありますが、壁画プロジェクトが心の扉を少しでも開く契機になったのではないかと不思議な力を感じました。

制作は総計8～10時間です。物語を読み、キャストイングし、形を切り出し、色を決め、全体の中でバランスを取り、全員の助けを借りて、仕上げていく過程に、自然に入っていることができ、制作の瞬間の中に希望を感じ、先生方の高揚感や、安堵と嬉しさが混じった表情が伝わってきます。

子どもたちを支える連携は社会を豊かにする

子どもたちが創作した壁画が、地域コミュニティの空間に潤いと豊かな心を届けることにも貢献します。地域住民は、子どもたちの活動を通じて新たな交流の機会を得たり、自分たちの地域への誇りを再認識したりすることができます。地域社会に与えるポジティブな波及効果の一例であり、地域活性化への間接的な貢献と言えるでしょう。



Galaxy S22



Galaxy S22

人生初の社会貢献の理解をさらに深め

子どもたちが創作した壁画は自治医科大学とちぎ子ども医療センター、独協医科大学病院、同日光医療センターなどの長い廊下に場を得て、難病の長期入院治療などが必要な子どもや家族、病院関係者の心を和ませ、勇気付けています。自分たちが取り組んだ壁画で社会貢献できることを幼少時から体験する機会を作っています。



「この指先に、この指先に、ここを集め・・・」

林 香君
美術家・陶芸家・空間環境芸術研究室主宰
文芸芸術大学名誉教授



写真1-佐野市立西宮館「やまなし」2018年

「この指先に、この指先に、ここを集め・・・」

心打たれ、涙が止まらなかったのは栃木県立盲学校100周年記念式典中の校歌の合唱。体育館に掲げられていた校歌の額中を急ぎ涙目で追った。ここでこの言葉に出遭う衝撃！アーティストの永遠のテーマ「どのようにして心を指先に集めて作品を創っていくか」なんていふと横に目をやると、指先で点字の原稿を猛スピードで読み進めて立派に司会を続けているあどけない笑顔。さらに抑えられず涙した。2000年より続く盲学校との交流があったからこそ「壁画プロジェクト」や「七色土玉プロジェクト」は生まれたに違いない。現在の私はこうして育てられたといっても過言ではない。

壁画プロジェクトの誕生

壁画プロジェクトは児童たちと最初に作った2004年11月20日小規模特設校指定から必死の児童募集を始めた城西小中学校(手塚英男元校長)でスタートした。その後いろいろの試みを得て現在70作品。この制作は一人ではできないことに大きな意義があり、One for All, All for One! 子どもたちは徐々に連携プレーをしはじめ、完成間際には一致団結! もちろんストーリーの

壁画化を容易にする要因には、絵巻がヒントになっている。物語の閉結から始まり、誰にとっても未知の世界であり完成予想図もない。しかし10時間後には魔法をかけられたように全員で創った壁画が立ち現れて魔法のプロジェクトが誕生したのである。

2011年の東日本大震災直後にラジオから流れてきた宮沢賢治の「どんぐりと山猫」がきっかけで大きく舵を切った。「宮沢賢治の文章の描写力からは映像が浮かぶ、子供たちの想像力を引き出せる。」と確信した。明治と昭和初期の過去2度の三陸沖地震の震災復興期は宮沢賢治の生きた時代であり、3度目になる東日本大震災後の「今」と重なったのである。全員がディスプレイしながら、協力して大壁画(w3.6m×h0.9m)を創り上げるプログラムが宇都宮市立西小中学校(手塚英男元校長)で進化した。溢れる色彩感覚にいつも驚かされる。もちろん無意識の中に天分が内在しているのが、実のところ確かく生命力がみなぎっている。どんなに寒色系の色を重ねても温かい。(写真1参照-佐野市立西宮館「やまなし」)

七色土玉プロジェクトの誕生

第二のプロジェクトは、平成26年度関東甲信越地区視覚障害者教育研究会 園工・

美術部会が栃木県で開催されることがきっかけで、盲学校の犬橋厚子教諭と共に開発。さらに聾学校の犬橋敬子先生の手助けを得て完成した。国立新美術館・日展会期中のわくわくワークショップでは全国から集まった陶芸家や漆芸家も指導者に加わり、栃木県立美術館「工芸の教科書」展会期中のあとネット(菅原良成会長)指導者研修とも「陶造169号・170号」の掲載へ続いた。障害の有無、年齢の高低にかかわらず、だれでもクリエイティブな独自の世界を作ることが出来るプログラムが抽出した。土を扱う技術を飛び越えた「土と遊ぶ」→「土で創り出す」というステップに載せ、生まれて初めて出遭う創造の感動を高いレベルで体験して欲しいという思いが強かった。子どもが脳から発せられる信号を形に表現しているように感じる。私が驚いた作品がある。(写真2参照-栃木県立盲学校4年 滝本尊音)どこにも存在しなかった作品が次々現れる。意識しか、無意識が、実に興味深いのは、短時間のうちにその作品が生まれ存在しているということだ。もっとチャンスを与えていきたい。

進化するプロジェクト

壁画プロジェクトには次の一手が待っている。益子町立益子中学校(岡良一郎元

校長・現益子町教育長)で、壁面から「よだかの星」の絵本を一人一人が編集集になるってオリジナルの本を創り上げたことである。作り上げるまでのエピソードは山ほどある。長持ちするようにパピオン製の布裏りに仕上げた。一冊しかない自作の絵本が完成。もちろん編集集も立派に成し遂げ、無限の可能性を示した。(写真4参照-益子町立益子中学校)



写真4-益子町立益子中学校



写真2-1 栃木県立盲学校4年 滝本尊音 2019年
写真3-1 宇都宮市立西小5年 2018年
写真3-2 宇都宮市立西小5年 2018年
写真3-3 宇都宮市立西小5年 2018年
写真3-4 宇都宮市立西小5年 2018年
写真3-5 宇都宮市立西小5年 2018年

り。そしてこのプロジェクトを通してすべての子どもには無限の可能性がある。「考える」を促す形に作り上げることで作品はそれぞれのチャレンジが見える形として存在する。しかも時代の中で活用し、生かしていくことができる。この活動を通して子どもたちが生き生きと輝き、さらに周りの大人を驚かせ魅了するその力は無限だ。

人生初の社会貢献!

子どもたちが創作した壁画は自治医科大学子ども医療センター、獨協医科大学病院、日光医療センターなどの長い廊下現場を得て、難病の長期入院治療などが必要な子供や家族、病院関係者の心を和ませ、勇気付けている。自分たちが取り組んだ壁画で社会貢献できることを幼少時から体験する機会を作っている。そして最終幕は創り上げてから5年間の貢献活動が続き、ちょうどこの3月に

病院から子どもたちへの感謝状が自治医科大学子ども医療センター山形泰倫センター長から学校に届されたのである。これまでの過程は

少しでも芸術の意義が子どもたちの心隔に届ってくれたらと願ったことである。(写真5参照-表彰状)多くの大人が芸術を通して子どもたちに伝えてくれたことが何よりも尊く、少しでも子どもたちに届くことを大切に願っている。

新しい出発

クリエイティブ・レインボープロジェクトの命名 2019年3月7日。子どもたちの作品に感動した国際ソロピニスト宇都宮から活動支援の推薦のお声が掛かった。初めて白石洋子女士宅を訪ねた際、壁画プロジェクトと七色土玉プロジェクトの二つを合体した呼び名が欲しいということになった。子どもの未来、夢を創るという目的から、七色のレインボーを入れたらどうかと白石御夫妻が提案され、横塚幸子会長も賛同し、創作の影絵として「クリエイティブ・レインボープロジェクト」が命名された。

芸術の力を信じて子どもたちの天分を引き出すプロジェクトの支援者、アーティスト、学校や施設の関係者のみなさんに心から感謝いたします。



写真5-「学校を美術館に」宇都宮市立西小中学校

9. プロジェクトへの協力

◇プロジェクト研究・開催協力（順不同）

- 協 力： 公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
栃木県子ども総合科学館
国立大学法人 宮城教育大学
公益財団法人 国際ソロプチミスト宇都宮
公益財団法人 佐野市民文化振興事業団
公益社団法人 日展／国立新美術館／日展会館
宇都宮陽南ロータリークラブ
宇都宮南ロータリークラブ 他
- 制 作： 宇都宮市立西小学校等、西原小学校、宝木小学校
宇都宮市立清原中学校、益子町立益子中学校
下野市立南河内小中学校
栃木県立上三川高等学校、栃木県立中央女子高等学校
他、小中高校多数
とちぎわんぱく公園（壬生町）
日光だいや川公園（日光市）
社会福祉法人 児童養護施設ネバーランド（鹿沼市）
社会福祉法人 下野三楽園（宇都宮市） 他
- 展 示： 自治医科大学とちぎ子ども医療センター（下野市）
独協医科大学病院（壬生町）
独協医大日光医療センター（旧）（日光市）
佐野市立南児童館・西児童館・田沼児童館・東児童館（佐野市）
とちぎわんぱく公園（壬生町）
日光だいや川公園（日光市）
白山商工会議所（石川県）
宇都宮市青少年活動センター・トライ東（宇都宮市）
開催学校・児童館・施設等内
- 開発協力： 株式会社オリオン
とちぎわんぱく公園
日光だいや川公園
- 連 携： 一般財団法人 ざばん環境・文化プロジェクト&協賛企業

10. 活動歴

壁画プロジェクト：主な実績と場所（2004年～現在）

年度	主な実績/ プロジェクト名	場所/参加機関	関連する 宮澤賢治作品 (もしあれば)	備考/意義
2004	芸術アメニティーの 取り組み開始	自治医科大学とちぎ子ども 医療センター	-	医療従事者アンケート実施、 取り組みの基礎確立
2005	芸術アメニティーの 取り組み開始	自治医科大学とちぎ子ども 医療センター	-	ピクトグラム制作、世界唯一 の内装デザイン
2008	壁画プロジェクト に発展	自治医科大学とちぎ子ども 医療センター	-	医療従事者と子どもが共同 制作に参加
2009	6作品制作	宇都宮市立西小学校	-	壁画プロジェクト本格化
2010	6作品制作(創立 100周年記念)	宇都宮市立西原小学校	-	学校との連携強化
2011	宮澤賢治作品を 題材とした制作を 本格化	とちぎわんぱく公園、宇都宮 市立西小学校など	-	東日本大震災を受け賢治作 品に焦点
2012	多数の学校・施設 で実施	さくら市立熟田小学校、烏 山聖マリアンナ幼稚園、益子 町つばさ学級、栃木県立上 三川高校、益子町立益子中 学校、国立きぬ川学院など	「よだかの星」 (益子町立中 学校)	地域社会への広がり、絵本 制作開始 (益子中)
2013	「みどりの愛護」功 労者国土交通大臣 表彰	自治医科大学とちぎ子ども 医療センター花咲 jii	-	庭園ボランティア活動が評 価される
2014	23作品実施	宇都宮市立宝木小学校	「にゃーご」	単一学校での大規模実施
2017	「姿川の龍」具現化	壬生町役場	ざぶん大賞受 賞作文「水と 地域の自然」	ざぶん賞との連携、2024 年より常設展示化
2020	壁画制作、絵本制 作開始	児童養護施設ネバーランド	-	児童養護施設での継続的 な取り組み
2022	絵本制作完成	児童養護施設ネバーランド	-	国際ソロプチミスト補助事業
2024	活動をざぶん環境・ 文化プロジェクト との連携 壁画制作	下野市立南河内小中学校、 とちぎわんぱく公園	「どんぐりと 山猫」	プロジェクトの組織的統合、 持続的発展へ 新規設置場所での継続活動
2025	継続展示	自治医科大学とちぎ子ども 医療センター 日光だいや川公園 とちぎわんぱく公園 白山商工会議所 宇都宮青少年活動センター	-	医療現場での癒しと教育的 役割を継続研究

教科書からの壁画制作



2025年夏 最新壁画プロジェクト制作より



「水仙月の四日」栃木わんぱく公園/1～6年合同制作



6年生



「やまなし」日光だいや川公園/1～6年合同制作

観察からの制作



教科書より 3年生



